



【職場】 山梨県

【職業】 林業従事者／大学非常勤講師／
シェアハウスオーナー

現在 山梨県



赴任国 バヌアツ共和国



【赴任地】 タフェア州

【職種】 体育

【派遣期間】 2007年1月～2009年1月

地方移住で見つけた「じぶんらしい」生業

浦 輝大さん 山梨県都留市 林業従事者／拓殖大学国際学部非常勤講師／シェアハウス「タマリバ」オーナー
Teruhiro Ura

「形のないものをこねくり回すより、重いものを持って、体を動かして、目の前の風景を変える。

それが自分にとっては、一番『生きてる』っていう実感が持てるんです」

32歳までアメリカンフットボールの選手として実業団でプレーした浦輝大さん。人生の半分を捧げたアメフト。その引退を決意させたのは、新たな情熱の矛先として見つけたJICA海外協力隊(JOCV)だった。帰国後は、東京2020オリンピックに向けた政府主導の事業やJICAにてスポーツを通じた国際協力に従事。しかしオリンピック終了後、地域おこし協力隊として山梨県都留市へと拠点を移し、未経験の林業の世界へ飛び込んだ。浦さんのダイナミックな人生選択の裏側には、一貫して「じぶんらしさ」を追求し続ける、ストイックなスポーツマンの姿があった。

浦さんの現在地

パーツを組み合わせて自分を表現する

「アメフトや国際協力も楽しかったで

すが、年齢を重ね、今が一番いい環境かもしれない」そう語る浦さんからは、単なる居心地の良さだけではなく、自分らしく生きていることへの深い充実感が伝わってくる。

現在の肩書は「きこり」だ。地域おこし協力隊を経て、林業を生業とする道を選んだ。チェーンソーを手に山へ入る時間は「心の癒し」だという。「一日山に入って自分の手で木を一本切ると、そこからパツと光が差し込む。一日をやり終えたという成果が、ちゃんと目に見える。かつて書類仕事に追われてた時代には得られなかった感覚です」一本一本の木と向き合い山を整備することで、景色が変わっていく。その手応えが、大切な時間となっている。

もう一つ、精神的な支えになっているのが、平日は都留、週末は家族の待つ都内郊外で過ごす二拠点生活だ。移住

において家族の理解は大きなハードルになりがちだが、浦さんの場合は少し違う。「妻には『いつも楽しそうでいいわね』と言われてます」と笑う通り、この物理的な距離感こそが、自分と家族、オンとオフを切り替える絶妙なスイッチになっている。

林業を軸足に、シェアハウス、大学での非常勤講師やアメフトのコーチなど、複数の活動で生計を立てる。「やっていることがすべてやりたいことだし、



バヌアツの子どもたちに人気だった三角鬼



組体操の様子



雨季には虹が出ることも多かった



空き家をDIYしてシェアハウスに

それで生活できている。複業というより、自分を表現するパーツがいくつもある感覚です」その活動の広がりや、浦さんにとっては収入源の分散ではなく、納得感を持って生きるための「じぶんらしさ」の表現そのものなのだ。

JOCV時代

役割があったアメフト選手から 何者でもない自分へ

2007年。体育教育の普及と活性化のためバヌアツへ派遣された浦さん。「赴任当初は、全く必要とされてなかったんですよ。現地の先生たちからすれば、現状維持が一番幸せ。急に来た日本人に何か言われても困る、という空気が漂っていました」と当時を振り返る。

人生を捧げたアメフト選手を引退し、次は「国際協力の世界でやりがいを感じたい」と飛び込んだJOCVだったが、バヌアツに来て突如、自らの役割と価値をゼロから証明しなければならない状況に置かれてしまう。そんな中、ふと学校の外に目を向けると、そこには、木に登り、海を泳ぐ、元気な子どもたちの姿が。「体育がなくても何百年も幸せに生きてきたバヌアツの人達に、日本流の『前へならえ』を持ち込む意味が本当にあるのか？」学校で体育をすることが当たり前の環境で育った浦さんは、あえて教育の本質と向き合った。「まずは体育の先生という肩書きを捨てました」現地の人と同じものを食べて、同じように笑う。そうすることで、ようやく生徒や先生の本音が見えてきたのだ

という。

「日本のやり方をインストールすることじゃなく、人と人として繋がれたこと。それこそが、僕のパヌアツでの一番の成果でした」

未来へのビジョン

自分のモノサシで納得して生きる

「人生の後半は、全部自分の意志で選んでやりきった、と納得したい」

力強く言い切る浦さんの言葉には、不思議と自分本位の食欲さを感じさせない。そこには、無理に相手を従わせるのではなく、相手に馴染もうと自ら行動する寛容な姿勢があるからだ。そしてその原点には、JOCV経験で得た「組織や社会での役割で人生を測るのではなく自分のモノサシを持つ」という普遍的

浦 輝大さん プロフィール

実業団でアメリカンフットボール選手として活躍後、JOCVとしてバヌアツへ派遣。帰国後の都内デスクワークを経て、地域おこし協力隊を機に山梨県都留市へ拠点を移す。現在は林業を軸に、シェアハウスやアメフトコーチなど複数の顔を持ちながら二拠点生活を送る。

な強さがある。

現在、都留での拠点は、地域おこし協力隊時代に購入し、DIYでコツコツと改修した一軒家だ。今はシェアハウスとして、移住希望者たちの最初の下宿先となっている。また、都内で過ごす週末は、アメフトのコーチとしてグラウンドに立つ。そこには、自分らしさのパーツを磨きながら、目に見える確かな手応えを大切にする実直さで、次世代の育成に邁進する浦さんの姿があった。



チェーンソーを使った森林整備